

視野障がいの見え方について

見る力とは、視力、視野、色覚、眼球運動、視空間認知など様々な要素により成り立っています。その中で、今回は視野の障がいについて考えてみたいと思います。

視野障がいは、中心部が見えにくい中心暗点や、周辺が見えにくい周辺視野欠損などがあります。その他にも見えない、見えにくい部位によって輪状暗点、弓状暗点、半盲などと分類されます。今回は、中心暗点と周辺視野欠損を取り上げ考えてみたいと思います。

1. 見え方について

これらの見え方として、中心部がブラックホールのように黒く見えるもの（図1）や、周辺がかすんで欠けて見えるもの（図2）などがよく例として挙げられています。人の見え方はそれぞれ個人差があるので一概には言えませんが、暗点・欠損の初期段階では気付くことはほとんどありません。徐々に「何となく見えにくくなったかな？」と異変に気付き、その後さらに進行してようやく自覚するようになり、このような見え方になります。なぜすぐに視野障がいに気が付かないのでしょうか。それは、

- ・人は二つの眼で見ているから
- ・絶えず眼球を動かし視線を変えて見ているから
- ・脳が自動的に補正をしてくれるから

です。ですから、気付いた時には視野検査をすると視野の半分近くが見えなくなっていたということもあります。実際にこれを書いている私も軽度の中心暗点があります。でも図1のように中心部に穴が空いたような見え方はしません。普段は（自分としては）普通に見えています。

図1 中心暗点



図2 周辺視野欠損



2. 日常生活での困難

① 夜間の移動

先に述べたように、自分が見やすいように脳で補正してくれていますが、夜間ではそうはいきません。中心暗点があれば正面から人が歩いてきたり、物が置いてあったりする場合、急に人や物が出てきたように見え、認識するのが遅れることがあります。

② 読み間違い

夜間ではありませんが、読み間違いもできます。これは、いちばん視力が出る中心部(黄斑部)が障がいされ視力低下が起こったことと中心暗点が合わさったことにより起こります。見えにくいので憶測で読んでいることが考えられます。脳が都合のいいように解釈してしまった結果です。

③ 周辺の把握

周辺視野欠損があれば、昼夜関係なく全体が把握しづらく物にぶつかる、つまずきやすくなるなどが考えられます。また、PCのマウスポインターを探せなくなるなど小さいものを追うのが困難になることも考えられます。

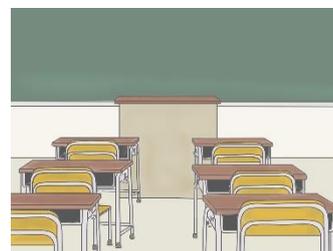
3. 視野障がいのある方の眼の使い方

視野障がいがある場合、いちばん視力があり見やすい眼の位置で見えています。授業中や向かい合って会話をしていても視線が合わないことがあるのは、このためです。

4. 配慮事項

視野狭窄の児童生徒がいる場合の配慮点として、

- ① 視野が狭い場合は、前の席に座ると黒板全体が見えにくくなるので、黒板が見やすい座席を選んでもらう。
- ② 見やすいフォント、行間、大きさを資料を提示する。
- ③ 読み間違いを減らすために、文字の下に定規や指先を置いて見ている場所をより意識できるようにする。
- ④ 暗くなる夕方の下校では、反射材やライトの使用を勧める。などがあります。個々の見え方に合わせて支援をお願いします。



5. 最後に

参考までに、視野障がい者が自身の見え方を紹介するカードが日本弱視ネットワークから出ていましたので紹介します。自分の言葉で見え方を説明しにくい児童生徒がいたら、このカードで試してみるのも良いかと思います。

見え方紹介カード デジタル版 | 日本弱視者ネットワーク

https://jakushisha.net/miekata_card.htm#text